

【コメント】

著者	内田 忠賢
雑誌名	東アジアの都市形態と文明史
巻	21
ページ	267
発行年	2004-01-30
その他のタイトル	Comment
URL	http://doi.org/10.15055/00002903

【コメント】

内田 忠賢

本報告は、建築様式における和洋折衷をはじめ、脱亜入欧の道を目指した日本の近代化における、景観の特色を、主として近代の東京をフィールドとして、考察した意義深い内容であった。私の専門分野は地理学であり、建築史家である報告者とは、視点が異なるため、初歩的なコメントとなる可能性があるが、ご容赦いただきたい。

本報告に対し、以下の3点をお教えいただきたい。

- 1) 日本人建築家が設計した洋風建築と、外国人建築家が設計した日本国内の洋風建築では、その景観上、あるいは空間構成上の相違点があるのだろうか。あるとしたら、どのような点であろうか。外国人建築家たちは、日本人のニーズに合わせ、あるいは、日本の風土を考慮に入れて、洋風建築を設計したのだろうか。
- 2) 本報告では、東京の外国人居留地に出現した「築地ホテル館」という興味深い建築物に注目した。日本を訪問し、滞在する欧米人を想定したホテルの建築様式のコンセプトは、建てられる場所により、多少は異なるのだろうか。都市（たとえば東京）のホテルと、避暑地（たとえば日光、箱根）のホテルでは、気候条件の違いに配慮した構造のほかに、コンセプトの大きな違いがあるのだろうか。
- 3) 東京における明治の洋風建築といっても、東京の中の地域により、そのコンセプトは異なったのではないか。地域に対応した工夫はあったのだろうか。たとえば、官庁街の丸の内の洋風建築と、盛り場の銀座のそれと、住宅街の青山のそれとでは、大きくコンセプトが異なるように思う。また、東京全体の都市計画と個別の洋風建築との対応関係について、もしご存じのことがあれば、ご教示願いたい。

（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科）